

族の特徴はあまり見られない。一方で、バウンが下働きをしていることなどから、従来のヒンドゥー社会にみられたカーストにまつわる社会的制約が、少しずつ崩れつつあることが窺える。また、ツーリストシーズンである9-3月はツーリズム関連の仕事をするが、雨季には村で農作業をするといったツーリズムの季節性に対応した流動的労働人口が大きいことが指摘できる。全国的な人口移動の中で、ツーリズム産業は安定していないが、格好の現金収入の機会を創出しているといえる。

現在、ダムサイドには外部の大資本が介入しておらず、また地域・国家による統制も充分でない。いわば、自然発生的に創出され、ローカルホストによって形成されてきたツーリストエリアだとい

える。現在抱えている問題は、1993年に生じたデモ、洪水、VISA代の値上げ敢行などによって、ツーリスト数が減少したことである。それらの出来事は、途上地域にありがちな政情不安、自然災害、環境破壊、意図不明な政策そのものであり、それによるツーリスト数の変動がネパールにおけるツーリズムに不安定さを助長させている。持続可能なツーリズムの発展のためには、環境的キャパシティに見合った規模で、ツーリストエリアを維持していくことが必要である。そのためには、ツーリズムという産業自体が、ホスト社会の人々にとって選択可能な経済手段となることが望ましい。その一方で、ツーリズム開発が過度にならぬよう、ホストの活動に対する規制が必要となる。

境界域における都市の地理学的考察

——フフホト市を実例として——

ウランドシン

境とは地理学の視点からみると、地域、或いは空間の一種として認識される。又、ある程度の範囲を有することから「境界域」ということができ、そしてそこに位置する都市は、一般的な都市としての性質に加え、境的な都市としての性質をも内包していると指摘できる。

境界域についての研究は、母国（中国）の地理学においてあまり見出せないが、筆者は敢えて未開拓の研究分野に挑戦し、地理学の視点から、事例研究をふまえて境界域の実態を明らかにし、境界域の一般的特徴に考察を加えることを本論文の第一の目的とする。具体的には、筆者の故郷であるフフホト市を事例に、その境界域における都市の特徴を、経済的、文化的側面から客観的に捉え、分析することを第二の目的とする。

方法として、境界域が対立統一（止揚）的な産物であることから、唯物弁証法に基づき、都市がその関連地域の結節点として存在することから、フフホトを周囲の関連地域との関わりの中で、分析していくことにする。現地調査においては、客観的な視角から故郷を認識する努力をし、また当事者としての視角をも併せ持つことを心がけた（客観と主観との視角を併せること）。

従来、地理学において、「境界」に関する研究は、専ら政治地理学の対象となってきた。そして地域区分に関する研究も「境界」に関わっている。しかしこれらの分野の視角から分析した境界は、「線」的なものとして扱っている例が多い。これに対し、筆者の問題意識は、複数の異なる同質地域が接する境界域の内部において、外からの影響がどのように顕れているのか、ということを解明することにする。

境界域は隣接する同質地域と同時に存在する地域空間であり、同質地域の空間的变化における質的变化を反映する地域空間である。そして境界域の中で異質的な要素が混じり合って、境界域の特有な性質が顕れる。動態的な視角から、境界域も変化するものである。

境界として、自然的なものと人文的なものの二つの側面から分析できる。両者の関係は、一般に自然の境界域が人文的境界域の基礎となっていると捉えられている。但し、政治的、行政的境界については、その限りではなく、人為的に決定されることが多く、人々の行動を制約する要因として強く働くという性格を持っている。

中国においては、平原と丘陵が広がる東南部と

高原と山脈が広がる西北部が、自然環境における最大の差異となっている。従って、人文環境も東南部と西北部の間に差異が現れている。つまり、中国の農耕地域と牧畜地域などの空間的差異として、明白に現れている。筆者の調査地域は、この境界域に位置し、具体的には漢民族地域とモンゴル民族地域の境界域に相当している。

フフホト市は現在内モンゴル自治区の首府である。長い歴史を経て、現代的な都市景観とモンゴルの民族的特徴とが、独特の都市景観を織りなしている。自然環境の側面から見ると、黄土高原とモンゴル高原の境界に位置することによって特徴付けられている。16世紀以前、幾多の北方遊牧民族が進出を繰り返していたが、16世紀のアルタン・ハンの支配下、「フフホト」城が創られてからは、漢、蒙の貿易集散地、交通要衝、軍事要塞などの機能を次第にもつようになり、発展してきた。

現在、一般的には、フフホト市は観光地としての草原のイメージで捉えられているが、都市景観は都市周囲と中心市街地において、農耕地域と牧畜地域、漢民族地域とモンゴル民族地域という対照的な要素が融合して、独特なイメージをつくりだしている。市民の生活に表れている以上の融合の諸相も、フフホトの特有性を際立たせている

が、一方で漢民族の影響が強いことを指摘することが重要である。フフホト地区において、人口の民族構成は都市の発展に従って変化しており、現在、人口の87.0%が漢民族で、9.6%がモンゴル民族である。産業面では、国の工業発展政策により牧畜業と関連する軽工業部門が大きく成長し、毛織紡績工業基地となっている。

以上より、境界域としてみたフフホト市において、経済的、文化的融合が達成されているのを指摘できよう。即ち農耕と牧畜の交錯地域の中心であり、貿易集散地としての機能を集積させ、経済的な融合を達成している。また、文化的な融合も進行してきたとはいえ、フフホト市における祭りや人々の考え方に、文化的融合の特徴が見出せる。「同化」に対しては、自身の民族に強く意識をもつことがみえる。こうした境界域における活力、そしてモンゴル民族にとって不可抗力である「同化される」という現実が、境界域における都市—フフホトの特徴を生ぜしめている。

境界域は異なる同質地域と同時に存在し、異質的な融合が最も明白に顕れる動態的な地域社会である。フフホト市はこういった境界域の縮図である。